

賦何色連歌百韻

二〇〇七年四月十九日から

二〇〇八年五月十九日まで

於 サイバースペース

しのめを寄せては返す藤の波

蘭舎

ともづなの影くぐるてふてふ

梢風

春惜しむ笙の音色の緩やかに

縹

築地の内はさんざめきをり

樂歳

鸚鵡てふ鳥のさかしき眼して

風

なほも硯をひき寄する人

舎

山の端に出でし月はや叢雲に

歳

薪積み足すやや寒の宵

縹

ウ

あめ鱒を捕りてたつきと為すをのこ
舎

せどにくさめの聞こえくる頃
風

勾玉の福耳に揺れすれちがふ
鏢

埴輪の丘の妹がおもかげ
歳

いくさある國に生まれしせつなさに
風

枯るる葛葉に雨の幽し
舎

うづみ火を掻き起こせども寒むごむと
歳

神の留守とや月はゆみはり
鏢

わたつみのいろこの宮を尋めゆかむ
千草

北の方には気棲よろしく
舎

患ひのふと軽くなる花衣
風

ひばりたつ野に燃ゆるかぎろひ
歳

み仏に閻伽たてまつる春の水
草

明石におはす君はのどかに
風

つれづれの紛れに昔語りなど

舎

あまをど名付けし駒のいななき

草

尾をひきて鬮にひきずる夏の声

歳

卯の花ばかりあけてゆく里

舎

物書けば物の取り憑くならひにて

風

なさは霧のはばむ深山路

歳

石置願ひの糸を辿りつ

草

つきづきしくも月の手鏡

風

背の君の帰り待たるる司召

草

箱根越ゆれば東声聞く

歳

ふし挿む西には小さき仏たち

風

はかなの夢や河面吹く風

舎

高瀬舟あたり声なし霜の朝

歳

たなごころには凍てしてふてふ

草

二ウ

くぐつめの憂へ掃ふは何ならむ

舎

断てぬえにしを断ちてささ酌む

風

覚めぬれば三年あまりはおぼろにて

草

春はどこしへ山ふかき村

歳

泉召沙汰なく更けてゆく人も

風

かげさへ暮れぬと鏡うち捨て

舎

虫しぐれ月にくだけるわがこころ

歳

野分の風の中に抱かれ

草

さ牡鹿の下葉にむすぶ露にぬれ

舎

ねぶつの声のすべりくる岡

風

餅花の揺れおさまりし床柱

草

薰物せむと手箱ひきよす

歳

せきあへぬ涙にむせて軀らは

風

唐の衣の紐のもつれて

舎

三

みだれ生ふ恋忘れ草忍ぶ草

歳

あくがれ出でし魂は螢に

草

その先は言葉とならず橋の上

舎

配流の宮に猛きものふ

風

折りて焚く紫のけぶりの目にしみて

歳

しぐれのはれて旅のたまづさ

舎

碑のあるじに似たる大鴉

風

髪さかだてしこけ猿の面

歳

これやこのよしありげなる笛の音

草

忘らるるほど憂きものはなし

風

その御身の五尺あまりを拭ひつつ

舎

鐘は夕べに霞む古寺

歳

降るはなを現化と思ふうれしさに

風

舞姫もがな弥生三月

草

三ウ

さはさはと色づくまへの里の宮

歳

水面に揺るる富士のさかしま

舎

ひとすじの炊ぎのけぶりはかなくて

草

ふみほこの暈とてもかくても

風

こぬ夜半は雪のあかりもうとましく

舎

恋は朽木を過ぐるこがらし

歳

梟の森に忘れて来し小袖

風

結びめぐらせて聖まします

草

ことはぎの声ひびかせて飼景桶

歳

かぼそき月のいともあてなる

舎

たまきはる命養ふ今年酒

草

尉とをうなの踊りみせばや

風

越前のくらげの骨の舞扇

舎

こひは波間に浮かれただよふ

歳

四

しがらみの世を知らぬげに鴟ども

風

国をはるかに常夏の月

草

身は遠流たよりこがれて秋をまつ

歳

頼めの里といふは何処ぞ

舎

筒井筒蹴鞠もすなる女の童

草

およびを漬ける清水きよらに

風

つれづれと籠り居たるをとがむれば

舎

ほつりほつりと語る行く末

歳

鋏を持つ力も息の戻るまで

風

地の底ひよりこみあぐるもの

草

たをやめの枢みおくる霜の道

歳

千束の文を君は残せし

舎

夜もすがら日はひもすがら読みつきて

草

市の売り聲いつか途絶へぬ

風

ナウ

花の雪捨てぬる舟に降りやまず

舎

離るる岸はあまやぎの糸

歳

くわんおんのかほ朧なるあかどきに

風

飼屋が上の薄様の月

草

歳重にも旅かさね来て草枕

歳

たゆむ眠りを驚かす鳥

舎

鈴の音の近づきくれば天馬なる

草

語りきへれば老ゆる巡礼

風